

# ダニエルの書 - 第百十六号

復讐の日々を解き明かす：エレミヤの警告と最後の世代に関する預言的探究

Jeff Pippenger

2024-03-04

前回の記事ではエレミヤ書50章を考察し、その箇所にある、アメリカ合衆国で間もなく施行される日曜法から始まり神の怒りで終わる、バビロンに対する裁きについて取り上げた。執行の裁きとは主の報復の日のことであり、それは西暦70年のエルサレム滅亡によって表されていた。西暦70年にローマがもたらしたエルサレムの滅亡は、ネブカドネザルによって行われたエルサレムの滅亡によって型示されていた。これらは合わせて、ツロの淫婦、すなわち黙示録17章の大淫婦に対する執行の裁きの二つの証しを与えている。

エレミヤは、まもなく施行される日曜法に始まって、主の報復が現代のバビロンに対して果たされる時、「その日、その時、主は言われる。イスラエルの不義を捜しても、もはや見つからず、ユダの罪も見いだされない。わたしが残しておく者を赦すからだ」と告げている。その時には、十四万四千人への封印はすでに完了している。

「兄弟たちよ、準備の大いなる働きにおいて、あなたがたは何をしているのか。世と結びついている者は、世の型を受けて、獣の刻印を受ける備えをしている。自己を信頼せず、神の前にへりくだり、真理に従うことによって魂を清めている者たちは、天の型を受け、額に神の印を受ける備えをしている。布告が発せられ、印が押されるとき、彼らの品性は永遠に純潔でしみのないものとして保たれる。」『証言』第5巻、216ページ。

裁きの執行は、バビロンから逃れよと人々に呼びかける黙示録十八章の第二の声から始まり、エレミヤは言う。「彼らの日が来た、彼らの罰せられる時が。バビロンの地から逃れ、のがれる者たちの声が、シオンで、われらの神、主の復讐、彼の宮の復讐を告げる。バビロンに向けて弓ひきどもを呼び集めよ。弓を引く者はみな、その周囲に宿営せよ。そのうちの一人も逃してはならない。彼女の業にしたがって彼女に報いよ。彼女がしたすべてに従って彼女に行え。」彼女への裁きは「弓ひきども」によって執行される。聖書における弓の射手への最初の言及は、イシュマエルに関するものである。

神はその少年の声を聞かれ、神の使いが天からハガルに呼びかけて言った。「ハガルよ、どうしたのか。恐れるな。神は彼のいるところで、その子の声を聞かれたのだから。立って、その子を抱き上げ、あなたの手でしっかり支えなさい。わたしは彼を大いなる国民とする。」神は彼女の目を開かれ、彼女は水の井戸を見た。彼女は行って水の皮袋に水を満たし、その子に飲ませた。神はその子とともにおられ、彼は成長して荒野に住み、弓を射る者となった。創世記 21:17-20

黙示録11章にある「大地震の時」は、アメリカ合衆国において間もなく制定される日曜法の時に始まる、ローマの淫婦に対する裁きの執行の始まりを指し示している。その「時」には、「第三のわざわいはすぐに来る。第七の御使いがラッパを吹いた」。第三のわざ

わいとは、第七のラッパのことである。教皇権のしるし（日曜礼拝）を強制し、神の權威のしるし（安息日礼拝）を堅持する者たちを迫害する者たちに対して神の裁きをもたらすために用いられるのは、イスラムの弓兵たちである。

ルカによる福音書21章で、イエスはエルサレムと神殿の破壊についての弟子たちの質問に答える中で、終末の歴史をも表す歴史的叙述を示している。彼は「報復の日々」に言及するが、それはメシアとしてのご自分の宣教の本質的な預言的特質であり、ナザレの教会で預言者イザヤの書を朗読してご自分の宣教の働きの開始を告げた最初の宣言の中で明らかにされたものである。ナザレでのその宣言とイザヤ書の箇所は、彼の宣教だけでなく、弟子たちのメッセージ、さらに具体的には十四万四千の運動の働きと奉仕をも表していた。

主なる神の霊がわたしの上にある。主がわたしに油を注いで、柔和な者に良い知らせを告げさせ、心の砕けた者をいやし、捕らわれ人に解放を、縛られている者に監獄の開放を告げ知らせるために、わたしを遣わされたからである。主の恵みの年と、われらの神の報復の日を告げ、すべての嘆く者を慰めるために。シオンで嘆く者に、灰の代わりに飾りを、喪の代わりに喜びの油を、憂いの霊の代わりに賛美の衣を与えるために。こうして彼らは義の樹、主の植えたものと呼ばれ、主が栄光を受けられるように。彼らは昔の荒れ跡を建て直し、昔の荒廃を復興し、多くの世代にわたって荒れた町々を修復する。よそ者が立ってあなたがたの羊の群れを養い、異国の子らがあなたがたの畑を耕す者となり、ぶどう作りとなる。だがあなたがたは「主の祭司」と呼ばれ、人々はあなたがたを「われらの神の奉仕者」と呼ぶ。あなたがたは異邦人の富を食し、彼らの栄光において自ら誇るであろう。あなたがたは恥の代わりに二倍を受け、混乱の代わりに自分の分を喜ぶ。それゆえ、彼らはその地で二倍のものを所有し、とこしえの喜びが彼らのものとなる。わたしは主であって、公義を愛し、焼き尽くす献げ物のための略奪を憎む。わたしは真実をもって彼らの働きを導き、彼らと永遠の契約を結ぶ。彼らの子孫は異邦人の間に知られ、彼らの末は諸々の民の中に知られる。彼らを見るすべての者は、主が祝福された子孫だと認める。わたしは主にあって大いに喜び、わがたましいはわが神のうちに歓喜する。主はわたしに救いの衣を着せ、義の衣をまとわせてくださった。花婿が装飾で自らを飾り、花嫁が宝飾で身を飾るように。大地が芽を出させ、園がその中に蒔かれたものを芽生えさせるように、主なる神は義と賛美を、すべての国々の前に芽生えさせてくださる。イザヤ書 61:1-11

エゼキエル書九章で印を受けた十四万四千人は、教会と世における罪を嘆き悲しんでいる者たちである。「主の恵みの年、そして我らの神の復讐の日」とは、シオンで嘆く者たちが慰められ、「主の栄光をあらわす」ために「義の木々」となる時である。彼らは主をあがめる。なぜなら、「その日、その時には、と主は言う。イスラエルの不義が捜し求められても、見いだされないからである」からだ。嘆く者たちは印を受けた者たちであり、彼らこそが「昔の荒れ跡を建て直し」、「先の荒廃を立て起こし」、「多くの代の荒れた町々を修理する」者たちである。彼らは「主の祭司と呼ばれ」、人々は彼らを「我らの神の奉仕者」と呼ぶようになる。

十四万四千人の義は、大いなる地震の時に彼らが旗印として掲げられるとき、「諸国民の前で芽生える」。彼らの義は段階的にもたらされる。というのも、「地がその芽を出し、園がその中に蒔かれたものを芽生えさせるように、主なる神は義と賛美を芽生えさせ

る」からである。十四万四千人への封印は、2001年9月1日に後の雨が到来したときに始まった。そのとき、地は芽を出した。芽がいつ芽吹くかをイザヤが示している。

量をもって、それが芽を出すとき、あなたはそれと論じるだろう。彼は東風の日には、その荒々しい風をとどめる。ゆえに、このことによってヤコブの不義は清められる。彼の罪を取り除く実は、これがすべてである。彼が祭壇のすべての石を、打ち砕かれた白亜の石のようにするとき、木立と像は立ち残らない。イザヤ書 27:8、9。

彼が「とどめられる」その「荒い風」である「東風の日」に、雨が「量られる」とき、「つぼみ」の「芽吹き」が始まる。「Stayeth」とは、抑えられているという意味である。黙示録第七章の四人の御使いによって四つの風が抑えられるとき、十四万四千人に印を押すことが始まる。そのとき「後の雨」は節度をもって「sprinkle」し始める。というのは、その節の「measure」という語は節度を意味するからである。十四万四千人に印を押す期間の初めには、後の雨は節度をもって注がれ、期間の終わりには、量りなしに注がれる。

神の御霊の偉大な注ぎ、すなわちその栄光によって全地を照らすあの出来事は、私たちが、神の同労者となるとはどういうことかを経験によって知る、啓発された民を得るまで、到来しない。私たちがキリストへの奉仕に全き心からの献身をささげるなら、神は量り知れない御霊の注ぎをもってその事実を認めてくださる。しかし、教会の大半が神と共に働く者ではない間は、そうはならない。利己心と自己放縦がこれほど明白で、言葉にすればカインのあの答え-「私は弟の番人でしょうか」-を言い表すような霊が支配しているとき、神はその御霊を注ぐことはおできにならない。この時代の真理、すなわち、いたるところでますます濃くなるしるしが万物の終わりが近いことを証しているという事実が、真理を知っていると公言する者たちの眠れる力を呼び覚ますに足りないなら、これまで輝いてきた光に比例する暗闇が、これらの魂を襲うだろう。最後の大きいなる審判の日に、彼らがその無関心について神に差し出すことのできる弁解の影すらない。なぜ彼らが神の御言葉の聖なる真理の光のうちに生きず、歩まず、働かなかったのか、そしてその行いと同情と熱心を通して、罪に暗く覆われた世に、福音の力と真実性が論駁しえないものであることを明らかにしなかったのか、その理由として差し出せるものは何もないだろう。

『レビュー・アンド・ヘラルド』1896年7月21日。

後の雨と十四万四千人への封印の試練の期間は、聖霊の注ぎの度合いが量られることから始まる。というのも、小麦と毒麦が収穫の時に達しているからである。雨は両者を成熟へと導き、そして試練の期間の終わりに小麦と毒麦は選り分けられ、小麦はそのとき「神と共に働く同労者であるとはどういうことかを、経験によって知る」ようになる。彼らはそのとき「キリストへの奉仕に全き、心からの献身をささげるであろう。神はその事実を、限りのない聖霊の注ぎによってお認めになる」。

「荒い東風の日」は2001年9月11日に到来し、「神の復讐の日」を指し示すメッセージとは対照的な、「後の雨」のメッセージにおける偽りの「平和と安全」のメッセージをめぐるハバクク論争が始まった。その時、小麦も毒麦も芽吹き、間もなく到来する日曜法による裁きにおいて現すことになる実を結び始めた。

また、これらのたとえば、審判の後には猶予期間がないことを教えている。福音の働きが完結すると、直ちに善と悪が分けられ、両者の運命は永遠に定められる。『キリストの実物教訓』、123。

一方の者たちはエゼキエル書第八章で太陽を拝み、もう一方はエゼキエル書第九章で神の印を受ける。ルカによる福音書第二十一章では、キリストは十四万四千人を指し示し、地上の歴史の最後の世代を示すしるしを掲げている。彼は、エルサレムの滅びから逃れるためにキリスト者が認識しなければならないしるしを示された。

あなたがたが、エルサレムが軍勢に取り囲まれるのを見るとき、その荒廃が近いことを知りなさい。そのとき、ユダヤにいる者たちは山へ逃げ、エルサレムの中にいる者たちはそこから出て行き、地方にいる者たちはエルサレムに入ってはならない。これは、書かれているすべてのことが成就するための復讐の日々だからである。ルカ 21:20-22。

イエスは「行に行を重ねて」そのしるしのさらに多くの預言的な特徴を示された。なぜなら、彼の言葉はルカだけでなく、マタイとマルコにも記録されているからである。

そして、この御国の福音は、すべての国々への証しとして、全世界に宣べ伝えられる。そのとき、終わりが来る。だから、あなたがたが、預言者ダニエルによって語られた「荒廃をもたらす忌むべきものが聖なる所に立つ」のを見るときには（読む者は悟れ）、そのとき、ユダヤにいる者は山へ逃げよ。マタイによる福音書 24:14-16

そしてまず、福音はすべての国々に宣べ伝えられなければならない。しかし、人々があなたがたを引いて行き、引き渡すとき、あらかじめ何を話そうかと思ひ煩うな。前もって用意もするな。そのときあなたがたに与えられることばを語れ。語るのはあなたがたではなく、聖霊である。兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子どもたちは親に逆らって立ち、彼らを死に至らせる。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる。だが、預言者ダニエルによって語られた「荒らす憎むべきもの」が、立ってはならない所に立つのを見たなら（読む者は悟れ）、そのとき、ユダヤにいる者は山へ逃げよ。マルコによる福音書 13章10～14節。

「復讐の日々」の最終的かつ完全な成就である最後の七つの災いが二つの階級に下される前に、御国の福音はすべての国民に宣べ伝えられ、公にされなければならない。福音のメッセージは、アメリカ合衆国で間もなく施行される日曜法の時に、十四万四千人が旗印として高く掲げられるとき、諸国民に与えられる。「復讐の日々」は、バビロンの大淫婦に対する裁きの執行の期間を表しており、その期間はアメリカ合衆国の日曜法をもって始まり、ミカエルが立ち上がり恵みの時が閉じられるときに終わり、神の怒りが最後の七つの災いのうちに注ぎ出される。

その期間とは、マルコが示す「時」であり、「大地震」の「時」であり、また十人の王が自らの第七の王国を教皇権に与えることに同意する「時」でもある。すべての国々に宣べ伝えられた福音を最後のひとりが受け入れたとき、猶予期間は閉じられ、神の怒りが憐れみなく注がれる。その期間は、旗印が掲げられ、福音がすべての国々に宣言されることから始まり、旗印によって宣言され、宣べ伝えられ、公表された福音のメッセージに

最後のひとりが応答するときに終わる。その期間は「復讐の日々」である。

ルカの福音書21章で、イエスはご自身の再臨の前に死ぬことのない最後の世代を特定し、その時代を明確に示しておられます。イエスは、そのしるしとして、預言者ダニエルが語った「荒らす憎むべき者」を挙げておられます。そのしるしとは、「聖なる場所」に「荒らす憎むべき者」が立つとき、すなわち「立つべきではない所に立つ」ときであり、同時にエルサレムが「軍勢に取り囲まれる」ときでもあります。

紀元66年、セスティウスによってエルサレムが軍勢に包囲されたとき、エルサレムのキリスト教徒たちは都から逃れ、ホワイト姉妹は、最終的に紀元70年に終結した破壊のさなかに一人のキリスト教徒も死ななかつたと指摘している。セスティウスは包囲を開始したが、理由は明らかでないまま撤退し、都のキリスト教徒たちは、そのしるしに伴う警告に従って逃れた。紀元70年にティトゥスは再び包囲を敷くことで破壊を完成させた。セスティウスによる包囲は、いわゆる第一次ユダヤ・ローマ戦争の始まりであり、ティトゥスによって遂行された包囲と破壊は、第一次ユダヤ・ローマ戦争の終わりであった。

その全体の歴史は三年半続き、包囲から始まり包囲で終わり、その始まりには神の民へのしるしが伴っていた。その歴史はキリストによって「神の復讐の日々」と特定され、これは彼らご自身の宣教において示すべき特定の要素であった。その日々は、まもなく施行される日曜法から始まり、人類に対する恵みの期間が閉じるときに終わる、ローマの淫婦に対する執行審判を表している。バビロンの淫婦の執行審判の始まりに、十四万四千人が旗印として掲げられ、これがしるしとなる。神のほかの群れがそのしるしを見るとき、彼らはバビロンから逃れ出るべきであり、その滅亡はエルサレムの滅亡によって予表されていた。

次回の記事で、ルカ21章の考察を続けます。